闇館

暗黒女帝・猫又垂氷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
闇館

【Ｎコード】
Ｎ３３３３Ｉ

【作者名】
暗黒女帝・猫又垂氷

【あらすじ】
支配者の遊びが始まった。
自身の快楽を満足させるために繰り広げられる「人間狩り」の合図に、そこに住まう者達はふるえながら門戸を閉ざすのだった。何も知らぬ旅人はその領内を通過しようとしていた。そして――
闇にとらわれた「宴」の時は始まった。今度の獲物は一体誰だったのか…。そしてその運命はどうなるのか……。
＊中世欧州を舞台とした、残虐歴史を元に書いた作品です。

狩り（前書き）

中世欧州の残虐歴史を元にしたフィクション小説です。過激な表現が出てまいりますので、ご注意ください。３話完結予定。

狩り

領主マルキドゥスが納める地に高らかに鳴り響くトランペットの音色。自慢の城塞の門を、白銀に輝く者達が駆け抜けていく。白銀の甲冑に身を包んだ騎馬隊。その後ろには不似合いな豪華な細工を施された黒塗りの馬車が付いていく。豪華な細工で目をくらませているその車には明らかに鉄格子がはめ込まれていた。一見しただけでは分からない。傍に近づいてみて、いや、中から外を覗いたときにはっきりと自覚できる仕掛けになっていたのだ。

完全なる武装集団が地鳴りと共に駆け抜けていく。領地の民達は、しっかりと戸締りをしてじっとその足音が駆け抜けるのを待っていた。

戦が始まるわけでは無い。この、トランペットの音色はただの領主の遊びなのだ。代替わりした若い領主にとっては単なる遊び。だが、民達にとっては恐怖の旋律にしか聞こえなかった。

「ドゥナミス、して、今日の獲物は…」

騎馬隊の到着を待ち切れなかったかの様に、領主マルキドゥスが一人の男に駆け寄ってきた。

その様子に、顔全体を覆った兜の中で苦笑いを浮かべた長身の男。当然、目の前の領主にはそれは見えてはいない事も計算のうちなのだろう。

ゆっくりとした動作で兜を脱ぐと、小脇に抱えたまま慇懃に膝を折って見せたのだった。

「御館様の御所望された獲物は一つきり…。これ以上はこの地では無理かと思われますが…」

腰まで来るほどの長い髪を床に這わせた状態で、視線を合わせる

ことなくそう事務的に告げたのだった。
「…構わぬ。そうなれば狩り場を増やすだけ…。いつものように、準備いたせ」
満足げに微笑みかける領主。その足音が遠ざかるのを聞いて男はゆっくりと顔をあげた。
去りゆく領主の後ろ姿をじっと眼で追うドゥナミス。ひそかに寄せられた眉根が彼の心の中を映し出していた。

馬車から引き出されたのは金髪の少年。たまたま旅の途中でこの領地に踏み入れてしまったらしい少年は己の立場が理解できないまま震えていた。
白銀の騎士団は旅の一行を突然包囲した。完全武装の騎士団に手向かった者達は次々に血に染まっていったのだった。その中での唯一の生き残り。どうやらその一行の中では下働きをさせられていた少年が、ドゥナミスの目にとまった。粗末な幌馬車にただ震える様に縋っていただけの少年。
手傷を負いながらほうほうの態で逃げ出す他の人共を一気に殲滅させる甲冑集団の手際。返り血を浴びた騎士団の姿を目にした途端に少年は気を失っていたのだった。
その少年が目を覚ましたのは豪華な細工の施された馬車の中。怯えながらも、外の男に向かって声をかけた。
「私は、何処に連れていかれるのでしょうか…」
馬車に並ぶ男は、声を返す事もなく前の方へと何やら合図を送ったのだった。
暫くすると、別の男が馬車へと並ぶ。
「この地の領主の館だ…」
新たに並んだ男がそう返事を返してよこした。
「…そうですか。…私はそこで何をすれば宜しいのでしょうか」
聞き返した少年の言葉に並んだ男は僅かに首をかしげて見せた。
「面白い事を聞く奴だ…」

くぐもった声は僅かに笑いを含んでいた。
「その…、領主様が新しいご主人様なのですね…」
「…なぜ、そう思う」
「いつもの事ですから…。私は孤児ですので…」
「…」
「食べさせて貰えるのならば…」
そう言って悲しげに微笑む少年を、白銀の甲冑に身を包んだ男はじっと見つめていた。
「…衣食住は保障しよう。そのかわり、余計な口は開くな」
そう言い残して隊列の前へと戻っていったのだった。

薄汚れた姿の金髪の少年は、兜を抱えたドゥナミスに向かって膝をついて見せた。
「何をすれば宜しいのでしょうか…」
心なしか、声は震えていた。
その姿を見下ろしていたドゥナミスは、苦笑いを浮かべながら、声をかけたのだった。
「こっちだ。ついてこい…」
相手の反応を見る事もなく前を進む男の後を、少年は急ぎ足で付いていった。そうしなければならない程、男の歩みが早かったからなのだ。
少年はキョロキョロと視線を動かしながらも、男の後ろをついていく。長く薄暗い回廊のその先、突然開けた眩しい空間が飛び込んできた。豪華な彫刻が数多く配置されたそこは噴水のように湯があふれていた。
中央の湯船を取り囲むように、人が寝そべる事の出来そうな程のベンチがいくつも配置されていた。そのいくつかには、肌も透ける程の薄布一枚を纏っただけの若い男女の姿。それぞれが、ベンチに

思い思いの姿で休んでいたのだった。
　そのすべてが金髪碧眼を持つ若者。そしてその表情は誰もがとろんと虚ろなように感じられた。少年にとっては眼のやり場に困る状況。頬を赤らめながらその場で俯いてしまった。
　いつの間にか目の前を歩いていた男は姿が見えなくなっていた。それに少年が気付いた時には、別の男の笑い声が聞こえていた。
　その声に、少年はきょろきょろとあたりを見回した。採光用の窓から降り注ぐ太陽の光が、暗闇の中に潜む声の主を見つけにくくしていたから…。男の笑い声は反響して、どの部分に居るのかすら解らない状況なのである。
「薄汚れてはいるが…、磨けば相当のモノになるか。流石だな、ドゥナミス。私の好みをしっかりと心得ている…」
　状況もわからぬ少年は、ただその場に立ち尽くしただけ…。
「…磨きあげよ」
　笑い声の主の命令に反応するように、ベンチについていた若者たちがゆっくりと少年を取り囲み始めた。
「あの、…何をっ」
　少年が身を捩る様に逃げ出すよりも早く、若者たちの手が少年の体を押さえつけた。剥ぎ取られていく衣服。浴びせられるお湯。表情一つ変えずに、若い男女の手が少年に向けて伸ばされた。
　少年が暴れ出そうが何をしようがお構いなしに次々と手は少年の肌に触れていく。
「洗い残しなど無い様にな…」
　暴れ出す少年を馴れた手付きで拘束していく若者たち。それこそ指の入る場所と云う場所すべて洗い清められるまでその行為は止まる事が無かった。時折聞こえる少年の悲鳴を聞きながら、領主マルキドゥスは傍らに控える男に小さく告げた。
「流石は我が自慢の騎士。中々の原石を見つけ出してくる…。洗い終えたなら、次の間へ連れてくるが良い…。あれは我が手で直々に…、少しずつ慣らしてやろう」

つるりと、己よりも背の高い男の首筋を指先で撫で上げた若き領主マルキドゥス。少年の泣き叫ぶ声を聞きながら笑い声も高らかに奥の部屋へと引き上げていった。残された男はすでに甲冑を解いていたドゥナミスであった。

「御館様にも困ったもんだ…」

誰に聞かせる訳でもなく、そう呟くと目の前で繰り広げられている光景へと視線をずらした。獲物を連れてくる度に繰り広げられる毎度の光景。ただし、今回ばかりはその段取りが異なっていた。

些か元気の良すぎる獲物を目にしてか、どうやら興味が惹かれたらしい。最初から相手をするなどという発言は未だかつて聞いた事もない。

（当面は、これで落ち着いてくだされば いいが…）

すでに少年は後ろ手に拘束され吊るされている。余程ひどく暴れたらしく、纏わりつく若者たちの中には傷を負っている者もいた程。かろうじてつま先が床に付く程度に吊るし揚げられ、しかも轡まで噛まされていた。涙で潤みきった瞳は怯えの色を隠しもしない。縋る様な視線を送る少年を見据えたまま、傍の若者に告げた。

「例の物を…」

無言のままドゥナミスに差し出された物を見て少年は呻き声をあげたまま激しく頭を振った。

若者が捧げ持つ蓋付きの入れ物に入っていた中身。あからさまに淫具と解る形状をしたものの存在。その傍らにはガラスの器が並んでいた。中にはどろりとした液体を湛えたノズルの付いた物。目の前の男がその容器を手に取り少年の背後に近づいた。

「大人しくしているが良い…。怪我するぞ」

云いながら、少年の尻の窄まりにノズルの先をあてがったのだった。

少年は一層頭を振った。呻き声も大きくなっていく。

構わずにドゥナミスはその先を押し込む。不自由な体勢のままのけぞる少年。ゆっくりと注入されるものの感触にその目は大きく見

開かれていく。何度か繰り返されたその行為の為に、少年の下腹部は膨れ上がってきた。徐々に少年の体からは脂汗が滲みだしてくる。
ドゥナミスがその傍を離れた途端に少年は両足をとじ合わせながらもじもじと身体をゆすり始めた。
「出して構わんぞ…」
その様子も見ずに男は少年に声をかけた。容器を傍の若者に与えると、男は静かに命じたのだった。
「こうやって奥まで洗え。…御館様の所望だ」
その言葉に、周りの若者たちの目つきが変わった。先程までの虚ろな表情では無く、明らかに羨望や嫉妬を含んだ眼差しへと―――。
「傷一つ付けるなよ、念のために言っておくがな…。磨き終えたら連れて来い」
そう言い残すと、ドゥナミスはその場から消えたのだった。

控えの間に座するドゥナミスの前に、少年は抱えられる様にして引き出された。衣服一つ身につけていない体。それを眺めまわすように男の視線が走った。僅かに拘束の後が残る白い肌。少年はただ床の上に這って居ただけだった。
「…どうして、…なんで」
そう繰り返される少年の呟き。
「此処に居る間は衣食住の保証はしよう。が、逃げ出そうとするのであれば命の保証はない」
目の前から見下ろす男の視線に怯えながらも、少年はじっと見据えた。
その視線を受け止めながら、ドゥナミスはゆっくりと立ち上がった。その手には薄物の布が握られていた。少年の傍に膝まづくと、ドゥナミスは馴れた手つきでその布を少年の体に纏わせていく。まるで、ギリシア神話にでも出てくるような姿にされた少年は戸惑いを隠せない様子。
「お前はこの館の主に仕える『生き人形』だ…。それが己の仕事…」

少年の馬車の中からの問いかけに、男は答えていたのだった。
ドゥナミスは少年を立たせると、主の待つ『次の間』へと連れだった。

その途中、少年は『生き人形』の本当の意味を知る事になった。
湯殿から続く通路は、薄暗く肌寒かった。が、それ以上に少年が鳥肌の立つ思いをしたのは大きな扉を潜ってからの事であった。
自分と同じ金髪碧眼を持つ若者達の姿にである。扉から続く絨毯敷きの部分は幾分高さがあった。そこから左右に、なだらかな段差が数段あったのだった。そしてその先の光景…。様々な形に拘束されている若い男女の姿。全員が己と同じものを身にまとっていた。充満する重苦しい淫靡な空気。ある者は木馬の様な器具に跨がされ、またある者は壁際に吊るされたまま性器を戒められての身を捩っていた。また別の若い女性は複数の者に挑まれながら体を揺らしていたが、胸の突起にからは細い鎖がたらされていたのだった。いずれもが苦痛の表情を浮かべながらも喜悦を漏らしていたのだった。
その光景を視界にとらえた若者の歩みがふと止まった。目の前を歩く男はそれに気が付いて歩みを止めた。
「どうした…」
事も無げに言い切る男。少年は声も出せたものでは無かった。
「このままここに留まり、あれらと同じ運命たどるか…」
云い切る男の声は静かすぎた。
「あれらは、御館様より払い下げられた者達…。表に居た連中と同じくただの接待係に過ぎない…。この館を訪れる好事家達のな…。しかも人形以下の扱いよ」
淡々と告げられる内容も、少年の耳には届いてはいないだろう。顔面はすでに蒼白となり、立っているのがやっとという状態のようだった。
振り返ったドゥナミスが、その少年に手を差し伸べるより早くその体はその場に崩れ落ちた。

「…手間のかかる」
云いながらドゥナミスはその少年の体を抱き上げるとその広間を先へと進むのであった。

「遅いぞ、ドゥナミス。あまり待たせるな…」
若い領主は男の胸の中にある存在に気が付き眉根を寄せた。
「如何した…」
「…毒気に当てられたようですな。通路を通る間に意識を失いましたので」
領主の傍に侍る男女は、ドゥナミスの腕の中の存在にも気を止めることなく主への奉仕に余念がなかった。
「中々に面白い反応を見せる…。泣き叫ぶでもなく、ただ意識を飛ばすなど…。連れてこよ」
領主の言葉に、傍に侍る男女はそっとその場所を開けた。ちょうど主の目の前。時にちらりと視線は流すものの、表情一つ変えることないその様子。
彼等は領主自慢の『生き人形』達であった。主の命に逆らう事なくその体を差し出す『性奴隷』。その中でも彼等は高貴な客を持て成す為に「教育」された者達。同じ金髪碧眼の持ち主達とは言え、明らかに表に居た者達とは趣が異なっている。逆らう事も出来ぬ程たっぷりと調教された者達ではあったが、それを普段は表情に出すことすらない。完全な接待役として、その役目だけをこなしていくのだった。逆らった後の惨めな末路を知る彼等は一言も口をきく事なくただ、領主の傍に侍るだけ。
その男女の間に、ドゥナミスは少年をおろした。
「随分と丹念に磨き上げたものだ…」
領主は満足げな笑みを浮かべて少年を眺めまわした。
「いきなり『次の間』へ上がった者などおりませんからな」
ドゥナミスは小声でそう答えていた。
「いきなり…。そうだな、これが初めてかも知れぬな。…これだけ

の者ならばこのまま『奥』に上げても良いかと思っていた所だが…」
流石の言葉に、他の若者もその少年へ露骨な視線を投げ付けた。ただ、声を一言も発する事なく――――。まあ、当たり前と云えばそうなのだが…。この次の間と呼ばれる場所に控える若者たちは美麗な容姿を持ちながらも声を出す事が出来なかったのである。出ても呻き声程度。そう、領主自らの手によって声そのものを奪われていたのだった。『声が気に入らぬ』ただ、それだけの事で…。
奥の間に控える者は云わば、完全なる領主のお気に入りと云う事になる。領主だけに仕え、領主だけにその体を開けば良いのだ。この館に連れてこられた若者たちは数多くいても、奥の間に上がれる者はほんの一握りに過ぎない。しかも領主自らその調教を行う相手など未だかつては一人もいなかったのだった。
ある程度、従順に飼いならされてから、領主の傍へと上げられるのがここでの慣習であった。
痴態を、調教の様を見て領主が振り分けていたのだ。それが今根底から崩されようとしている。嫉妬に歪む『生き人形』達の表情を、領主マルキドゥスは笑みを浮かべて眺めていた。
「ドゥナミス。そのまま、連れてこよ」
云うと領主は立ち上がり、奥の間へと続く扉に手をかけた。
云われた男は深い溜め息交じりに少年の体を持ち上げると、領主の後へと続いたのだった。

破瓜

今だ意識の戻らぬ年端もいかぬ少年。領主マルキドゥスの前にただその肌を晒して横たわるばかりだった。

奥の間には領主以外はその肩腕のドゥナミス以外は入れない。他に居るのは領主お気に入りの『生き人形』達だけである。

容姿端麗な者達の優雅な立ち居振る舞い。更に此処に仕える者達はすべてが他の芸にも秀でているという者たちばかり。ある者は舞踊に通じ、ある者は音楽を奏でる事を得意とする。それぞれが一芸に秀でた見栄えの良い若者たち。全てが領主の為にその技を磨いていく。が、決してそれは心からそう感じている訳では無かった。逆らった後の末路をそれぞれが知っているからなのである。

ここの領主に離反すれば己を待ち受けているのは無限ともいうべき恥辱の数々。彼等はそれを幾度も目のあたりにしてきたのだった。仲間同士手と手を取って逃げようとしたかつての『生き人形たち』の末路をその目で見てきたのだ。

調教と云う名の拷問。苦痛と快楽の狭間で、その精神を崩壊させ半ば廃人と化した若者たち。そしてその最後は…。見るも無残なただの肉片へと変わっていったのだった。ここの領主自身はその光景を微笑みを湛えて見つめ続けていた。彼等は、その横顔を決して忘れはしない。周りの誰もが目を背けたくなる様な光景を食い入る様に見つめつ一対の瞳の存在をである。さしもの、従者ドゥナミスですらその光景を眉根を寄せて見つめていたのだった。

逆らえぬ主の命令。逆らえば待っているのは死以上の――――。ここに囲われる若者たちはそれを知っていた。

領主マルキドゥスの手ぶりだけで彼等は動いた。言葉の無い指示にただ黙々と従っていった。ある者は何かの小箱をその手に携えてきた。またある者は横たわる少年の体からその纏う布を剥いでいった。そして別の者は他の箱を持ってくる。領主の周りに置かれた数

々の小物。それを目で確認すると、静かに領主は手を振り払った。音もなく、ただ一礼のみを残して部屋を出ていく若者たち。そこに残されたのは僅か三人だけ。

嫌な予感にドゥナミスの表情は歪んだ。

「…準備を」

静かに下された命令を受けると、ドゥナミスは領主の傍の小箱の一つに手をかけた。派手な意匠をこらした鉄環が納められているその箱。二つの環が短い鎖で繋がれた物二組納められていた。

「左右にな…」

ドゥナミスがそれを手にするとすぐに次の命令が下った。

云われるままに、少年の両手足にそれをつける。未だに意識を取り戻さないのが幸いなのか。二つの拘束具によって、それぞれ右左の手足が結び付けられたのだった。身体を動かそうとも出来ない格好にである。その腕を広げれは嫌が上にも両方の足は広がってしまう格好である。

「起こせ…」

云われるままに、ドゥナミスは少年の体を背後から抱えた。ちょうど領主に向かって其の足を開く格好にである。

領主の視線はその幼い少年の股間に向かっていた。

「綺麗な色をしている…。未だ未使用か…」

「さあ、そこまでは解りかねますがね…」

「まあ、この形で経験済みとは考えにくいがな…。なれば先に快楽を与えよう…。そこから始めても悪くはないだろう…」

ドゥナミスに向けられたその言葉。領主の視線は少年の背後の男に向けられていた。その視線を受けながらも、ドゥナミスは返答を返す事は無かった。

領主マルキドゥスは、視線をそのままに少年の股間を弄り始めた。規則正しかった少年の吐息が徐々に乱れ始めていく。微かに閉じられた瞼が震えを見せる頃には少年のそれは緩く立ち上がりかけていた。

「…くふっ」
少年は短い吐息と共にその瞼を持ち上げた。初めて目にする男の存在に脅えを見せた少年は身を捩ろうとした。かちゃりとなる鎖の音。背後の人の温もりに顔を見上げれば無言のままで見下ろすドゥナミスの視線にぶつかったのだった。が、その視線もすぐに外れる事になった。
「ひゃあっ…、痛いっ…いやああ…」
領主の手が目覚めた事を良い事に強く扱き下ろしたのだった。その刺激に少年は仰け反って涙を流した。その刺激にか僅かに萎えたそれは、形を変えていたのだった。
「痛い、いやっ…。触らないでええ…」
突然襲った痛みに少年は恐慌状態となった程。身体を動かして逃げを打とうとしても、拘束具と背後の男がそれを許してはくれなかったのだった。
「良い声で鳴く…。そんなに痛むか…」
目の前の領主の言葉に少年は激しい程の頷きを見せたのだった。
「お願い…。もう…」
「痛むだけか…」
再びの領主の言葉に、少年は大きく頷いた。
「それは、かわいそうな事をした…」
領主の顔は微笑みにあふれていた。
そっと、別の箱から小さな容器を取り出すと領主はその中身を少年の一物に流しかけたのだった。
「もっと違う感覚も感じてもらおうか…」
領主の手にしたモノを見て少年の顔はこわばった。細長いガラスの棒。それは捩じりの入ったものであった。ぐいっとひっ張り上げられた少年の物の先端にそれが当てられたのだった。
「いやあ…、お願い…止めっ……」
ぐいっ、と押し込まれていく刺激に、少年は声も出せずに仰け反った。全身に激しい震えを見せながら。

「おや、声も出せない程であったか…」
笑いを含んだ領主の声も今は少年には届いてはいないだろう。
「持ち上げろ」
ドゥナミスに再びの命令が飛ぶ。
ゆっくりとドゥナミスは少年の膝を抱えあげた。股間に細い棒を咥え込まされたまま、少年は秘門を領主の目の前に晒す格好となった。再び注がれる液体の存在に、ただ少年は弱々しく頭を振って見せた。
「どうやら、こちらも初物らしいな…」
領主が手にしているのは一番小ぶりの張り型。それでもゆうに大人の指先ほどの太さは有る代物。
「上手に飲み込んでみよ。さすれば痛み以外のモノも感じる事が出来るであろう…」
容赦のない勢いでめり込まされた張り型に、少年の体の震えは一層大きくなった。根元まできっちりと埋め込まれたとき始めて背後の男が少年の体を離したのだった。
横たえられた寝具の上。少年は足を閉じる事も叶わずただ全身を震わせていただけであった。
「今暫く耐えてみよ…」
その姿を嬉しげに見つける領主マルキドゥス。
その姿を見ながら、ドゥナミスはその場から立ち去ろうとした。
「…まだ、行くことならぬ、ドゥナミス。これの後は御主に任せようから…」
「…」
「この分では暫くかかりそうだからな。かといって他の連中ではこれを壊しかねないだろう。後暫らくは快楽だけを覚えこませよ」
「私にこれをどうしろと…」
「我にする様にな…。己の物を喜んで受け入れる様になる頃に本格的に仕込もうぞ…」
「…」

「解らんか。気に入ったというのだよ、これがね。お前同様にな…」
云いながらドゥナミスの胸元にその手を走らせる領主マルキドゥス。
「我が熱を…。滾りを鎮めてくれ…」
領主がその身を任せるのは目の前の男にだけであった。少年をそのままにしたまま、領主はドゥナミスの胸元を弄り始めた。欲望に潤んだ瞳を己の騎士に向けたまま。
「…これは、どう致しますので」
殊更にドゥナミスは静かに言った。
「今暫くかかるであろう…。身体に馴染んでくるまではな…」
領主の言葉のままに、ドゥナミスはその若い主の体を組み敷いていった。拘束された少年のすぐ傍で―――。嬉々としてドゥナミスの手管に乱れていく領主の姿。その体を自ら返すと自ら男を受け入れる姿勢をとったのだった。獣のように這うその若い領主にドゥナミスは己の物を付き入れた。甘い吐息と共に絞りを銜えてくるその体は、ドゥナミス自身が仕込んだようなもの。奥の間に居る僅かな者達しか知らない領主の乱れるその姿。領主の吐息はいつの間にか喘ぎへと変わっていった。
その吐息に混じって聞こえる微かな声。
拘束された少年は、領主の痴態に触発されたのか異物を咥え込んだままでその身をもじもじと捩らせ始めたのだった。その表情からはすでに苦痛の色はなく、肌も僅かに染まり始めていたのだった。
それを視界に捉えたのか、若き領主の手が少年の股間へと伸ばされた。
ドゥナミスは一度マルキドゥスの体を離すと、その手が最も動かしやすい位置へと身体ごとずらしたのだった。その行動に一度は不満げな視線を投げつけた領主ではあったが、ドゥナミスの意図を汲み取ると再び目の前の少年へと手を伸ばした。
ちょうど領主自ら少年の股間に顔を埋める様な位置。再びの突き上げに領主の吐息がかかるのか。少年は苦痛とは違う声を漏らし始

めた。泣き声の様な甘い吐息。
「熱い…、体…変に…な…」
ゆるゆると扱き揚げる領主の手管に、飲み込まされた異物ごと腰をふるわせ始めた少年。
「ひゃあっ…、そ…れ…痛いっ…」
股間の細い棒を弄られ少年は身悶えした。
「ふっ…うっ。痛いだけではあるまいに…」
自ら男の物を受け入れながらもその手は容赦なく少年の物をいたぶり続ける。
身動きの出来ない不自由な体を捩りながらも少年は嗚咽を漏らし続けた。股間を弄られるたびに、少年の口からは飲みきれない唾液があふれ続けていた。すでに視線は蕩けだし、棒の隙間からは透明な液体をタラタラと零し続けていた。
その二人の様を冷静な目つきで眺めながらドゥナミスは腰を使い続けた。が、領主も相当に感じきっているのだろう。いつも以上に内部の絞りあげが強まっていた。
「流石に効くらしいな…。初物でもこの乱れようとはな…。いずれ薬効無しにな…」
「それも近いうちになるでしょう」
ドゥナミスの言葉に、領主は酷薄そうな微笑みを浮かべた。少年をいたぶる手はそのままに。
「なれば、このまま破瓜居たそうや…」
「…お好きに。貴方様のモノなれば」
云うといったんドゥナミスはその身を引いた。領主の前に回る様にして、少年の足を引き上げた男。さらけ出された後ろに差し込まれた張り型は、ひくひくと動きを見せていた程。
領主は少年の後ろから張り型を引き抜くと再び媚薬をその穴の中にたらしこんだ。
「…いや、許して」
少年の懇願が小さく漏れた。

領主はその穴に己の立ち上がったものを押しあてた。押し込まれる刺激に少年の口からは激しい悲鳴が漏れた。それを構わずに進めていく領主の表情が歪む。
「流石に、またきついな…」
「まあ、広げてもいませんからな…」
目の前の男はそれを表情もなく見つめた。
「ひいいいっ…、抜いて…痛いいいいっ…」
間の挟まれた少年は頭を激しく振って泣き叫ぶ。領主の動きに合わせる様にその泣き声も大きくなっていく。
悲鳴を上げながらそれでも少年の股間の物は淫らに動き続けていた。領主は少年の股間に突き立てられているモノをゆっくりと引きぬいていった。途端に勢いよく溢れ出してくる粘液。
「どうやら、痛いだけではないようだな…」
云いながらも領主はその動きを止めようとはしない。その言葉に少年は泣きじゃくりながら頭を振っていた。
「もう…、終わ…ら…せてぇ…」
喜悦の放出に沈みかける意識の中、少年は懇願を繰り返していた。
「なれば、その男に頼むのだな…」
領主の言葉に少年の視線はドゥナミスに向けられていた。
その視線に、男は眉根を寄せただけ。
「もう…、許して…」
憐憫を含むその少年の表情も、男には何の感情も上付けなかったのか。じっと目の前の領主にその視線は向けられた。
「どうする…。ドゥナミス」
何かを期待するような領主の表情。
「よろしいのか…」
確認するような男の言葉。
「このままでは、我も終われんのでね…」
動きもそのままで、目の前の男に差し出される領主の舌先。ドゥナミスはそれを己の舌先で絡め取ると貪る様に味わっていった。

「貴方のご命令とあらば…」
「…よく言う、己が…」
外れる唇の合間にかわされた睦言。
少年に伸し掛かる姿勢のままの領主を背後からドゥナミスのモノが貫いていった。

縛

少年はジュミナスと名付けられた。ここの領主のそれが趣味であった。今までの名を捨てさせ、全てを己の意のままにする。この館で飼われる『生き人形』達全てがそうであった。中には名を持たせられない者もいた。ただ、番号や記号で呼ばれるだけの存在も…。領主からその名を呼ばれるという事はこの館では特別な意味を持つのであった。

「起きたか、ジュミナス」

ふとそう声を掛けられた方をゆっくりと見た少年。豪華な寝台の上に横たえられた己の体は未だ言う事をきかず、寝返り一つ打てない有様であった。

連日に及ぶ二人がかりでの虜辱。嫌だと泣き叫ぼうが、痛いと涙を零そうがその手が離れていった事は無かった。最初の数日のみゆっくりと与えられた休日。それも破瓜の傷がいえた頃には再びの行為が待っていたのだった。

いつの間にか心よりも体の方がその行為に慣れていってしまった。苦痛の先にある快楽を覚えこまされた瞬間から己の体は変わってしまった。消えない肌の痣。吸い痕以外の緊縛の痣がその体に残っていた。それでも、この体はそれを嬉々として待ち受ける様になってしまったのである。そして、この男が目の前に現れる意味も―――。

凍てつくような視線を向けてくる男が時折垣間見せる優しい表情。ジュミナスにはそれが気がかりでならなかった。

また連れ込まれたのは部屋付きの浴室。この部屋の中には自分とこの男しか居ない。領主の意向で、ジュミナスはこの男に預けられた状態なのだ。

「這え、ジュミナス。…何度言えば分る」

冷たいその声には、ジュミナスの体は反応していた。言われるま

まに獣の体勢を取る少年。
次の瞬間には後ろから大量の液体が入れられた。
「…ふっ、苦しい…、もう…これ以上は…」
細身の下腹部が張り出してくる感覚に、ジュミナスは涙をこぼした。
「苦しいだけではなさそうだな…」
背後の男の声が笑いを含んでいた。
〈洗浄〉と云う名のその行為にも、ジュミナスの体は反応を返していたのだった。たった二人っきりになれる僅かの時間。いつもの行為にも、体は浅ましく反応するようになった。
徐々に増やされる注入量。しかも、それだけでは無かった。
「今日はどこまで耐えられる…」
「…ドゥナミス様」
男を見つめる少年の声は震えていた。
浴室にあつらえられた台座の上にその体を惜しげもなく晒しながら横たわる男を、少年はただじっと眺めていただけだった。獣のような姿勢のままでである。台座に横たわった男はそれ以上の手出しをしない。ただ言葉で命じるだけ…。少年はその言葉を待っていた。
だが、この日に限って男は何も言わなかった。ただ悠然と少年を眺めているだけ。逆に少年の方がそれに耐えきれなくなったのだった。
「ドゥナミス様…」
「どうした」
冷たく返される言葉に、少年は這いつくばった姿勢のままで男の足元に近寄って行った。
「どうした。…いや、どうされたいんだ」
男の言葉に、もじもじと腰を震わせるだけの少年。僅かに頬を赤らめただけで、それ以上の言葉も無かった。
逆にゆっくりと身を起こした男が少年の胸元に指を走らせた。小さな突起をいたぶる様に揉みしだく。次第に少年の腰先は震えを見

せ始めた。途端に少年の後からは水音が溢れ出してくる。それを男は酷薄そうな表情を浮かべたままで見守っていた。
「この程度で漏らすとはな…」
男の声に少年はびくりと身を震わせた。涙目になったその表情を男に向けながらも震えだす腰先を止める事は出来なかったようであった。
ゆったりと立ち上がりかけている少年の股間の物を目に留めると、男は目元だけを緩めていた。
「仕方もない…。次はもう少し耐えてもらわねばな」
流れ出した物の代わりとばかり、再び同じ様に後ろから大量の液体を注入される少年。その苦しさに、少年の体は小刻みな震えを見せたのだった。が、今度はこれだけでは終わらなかった。太く短い張り型までその後ろにピッチリと納められたのだった。
迫りくる排泄感にも少年の後ろは吐き出す事を許されなかった。
「…ドゥナミス様。苦しい…」
縋る様な視線で、少年は目の前の男に許しを請うた。が、男はそれを黙って見下ろしているだけ。徐々に少年の皮膚からは脂汗が流れ始めた。
這いつくばったままの少年の体をゆっくりと起こし始めたドゥナミス。ちゃぷりと動く腹の中の水音に少年の顔が苦痛に歪む。台座の上にその小さな体を抱き起こすと男は背後からその体を弄りはじめたのだった。
少年の口からは喘ぎとも啜り泣きとも取れる様な声がひっきりなしに漏れ聞こえ始めた。両胸の突起を背後から力任せに捻りあげられればそれだけで少年は仰け反りながらも喜悦の徴を噴き上げるのだった。
「ふっ…、もう…クルうぅ…っはあ、アア…」
激しく頭を振る少年からは汗とも涎ともつかぬモノが飛び散っていた。少年の股間はだらだらと蜜を溢れ出させているだけ。
「もう…。許してぇ…、お願い…出してぇ…ひゃうっ」

少年の懇願も気にせず更に股間をいたぶりだす男。徐々に少年の体の震えも大きくなっていく。まるで痙攣を繰り返すかのような大きな震え。見開かれた少年の瞳からはとめどなく涙があふれかえっていた。徐々に失われていく焦点。それを確かめるとドゥナミスは、やおら後ろに食ませていた張り型を引き抜いた。途端に勢いよく噴き出す液体。同時に少年の股間からも勢いよく噴き出していった物。

小さな声を漏らしながら全てを吐き出し終えると、少年はぐったりと意識を飛ばしていた。

後ろにドゥナミスの大きなものを食んだまま、前からは領主自身がその体をいたぶり続けていた。紅く膨れ上がってしまった胸の突起を殊更に強く捻られる。その刺激だけで少年の股間の物は大きく揺れていた。が、吐き出す事も叶わないようにその根元には皮のリングがはめ込まれていたのだった。

「ひゃうっ…。もう…ひいっ…っ…」

「随分と良い声で鳴くようになったものだな…」

後ろ手に拘束され身動きも満足に取れない状態でドゥナミスの体の上を強制的に跨がされている少年。男はただその体を横たえているだけに過ぎなかったのだが…。

少年の吐き出す拒絶の言葉とは裏腹に、その体は刺激を欲して自ら付き入れようと上下に動きだしていたのだった。

「…そろそろ、我が所有の証を付けてやろうか」

領主の言葉に耳を傾ける余裕もない少年。領主の手にしたモノが目にとまっていれば多分にその表情はこわばっていたに違いないのだが…。

「ひっ、ぎぃいいいい…」

ひと際大きな声を上げながら少年は男の上で身悶えた。同時に下になった男からは苦痛に似た声が聞こえた程だった。

引っ張り上げられた左の乳首には鋭い針が付きぬけていたのだった。

「そら、もう片方にも付けてやろぞ…」

云う領主はもう一本の針を手に取っていた。
それを目にした少年は力なく頭を振り続けた。涙で歪んだ顔のままに。
「御館様…、このままでは」
下になったドゥナミスは何かを示唆するように声をかけた。それを感じ取った領主は、少年の口に轡を噛ませた。
「…そうだな。二度目の刺激に舌を噛まれたのではなあ…。それと、これも取ってやろうか…」
少年の股間を戒めていた革製のリングも外された。先程からの刺激に耐えかねたように、少年の股間はししどに濡れ始めたのだった。
領主の手が右の突起を捉えた途端に、少年の表情は恐怖に歪んでいった。
「良い顔をする…」
領主は優しそうな微笑みを浮かべたまま、容赦なく少年の突起を貫いたのだった。
呻き声をあげながら仰け反る少年。が、その股間からは大量の喜悦を零していたのだった。襲い来る痛みと同時に少年は強い快感を感じていたのだった。
少年の白い肌の上を真っ赤な血潮が彩っていく。領主は満足そうにその流れ落ちる血潮を舐めとっていた。
その後少年の乳首には一対の黄金の輪がはめ込まれた。その間をこれも黄金の鎖が渡されたのだった。その鎖の中央にはまるでペンダントのように領主の紋章を彫り込んだ指輪が入れられていた。
「これで、御主は我がものぞ…。これが我が所有の証なれば」
云いながら、領主はその鎖をくいっと引っ張った。
少年は、嗚咽を零しながらもその刺激にまた腰先を振りはじめた。だが、その表情は虚ろに近い状態であった。
快楽と苦痛の狭間に囚われた哀れな少年は、乞われるままにその身を差し出すようになっていった。最初の頃の生き生きとした表情はしっかり見る影もなく、ただトロンとした表情のままで…。

それでも、時折ドゥナミスを見つめる視線は柔らかくまるで笑顔を向けているかの様にも思える程であった。優しい言葉もなく、己の体をいたぶり続ける二人の男。その片方を迎え入れる時だけ、ジュミナスと呼ばれる少年の表情は僅かに微笑んでいるかの様であった。

縛（後書き）

「人間狩り」そして「ペット調教」――。歴史的な出来事を、ＢＬ小説風にまとめてみました。作者にとって、ヨーロッパ史に関連する小説を書くのはこれが初めての事になります。つたない文字書きが上げた作品に、色々評価をつけてくだされば、今後の参考にさせて頂きます。また、次の作品を引っ提げてまいりますので、その時はどうぞよろしく。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3333i/

闇館

2010年10月8日13時58分発行